

国語教科書に望むこと

—平成13年検定版中学校国語教科書の分析—

岸 洋 輔

1. 教科書を考える一つの視点

誰が、教科書を「作る」のか？

出版社が教科書を作る。しかし、出版社が独自の編集方針をもとに自由に教科書作りをしているのではない。教科書は文部科学省の学習指導要領の指針を踏まえて作られている。では、その指針にすべて従って作られていたのだろうか。そうであるとは一概には言えない。出版社は多くの国語教師が使う教科書を作ろうとする。そこには、国語教師の意向が考慮される。これも教科書作りに大きく反映される。言うなれば、教科書は、出版社の編集方針、学習指導要領の指針、国語教師の意向が、それぞれ重なり合って形作られていくことになる。つまり、教科書を「作る」(＝教科書作りに影響を与える)のは、出版社ばかりではなく、学習指導要領でもあり国語教師でもある。

そこで、この三者が教科書にどのように関わり合いを持つのかということの考察をしてみたい。

その考察の材料として、平成14年度版の中学校国語教科書を

とりあげる。それは、この教科書がその三者の関わり合いを端的に示しているからである。

なぜ、平成14年度版の中学校国語教科書なのか？

文部科学省は平成10年に学習指導要領を改訂している。この教科書は、平成13年に文科省の教科書検定を受けたものであるから、この平成10年改訂後の最初の教科書である。(この改訂後、文科省は平成11年、12年に検定を行ったが、11年に申請した出版社はなく、すべて12年に申請されている。翌13年に検定が終了し、平成14年度から使用された。以下この教科書を「13年検定版」と表記する。)

この平成10年学習指導要領の改訂は、教科書作りに大きな影響を与えた。そのポイントとして私は二つあげる。一つは「表現」重視の国語教育であり、もう一つは「総合学習」の新設と「ゆとり教育」とによる国語の授業数減である。「表現」教材を増やすことが課せられ、一方国語の授業数減により教科書全体の教材数を増やすことができないという難題を、教科書を作る側は背負うことになったのである。その結果としてこの13年検

定版は、出版社と学習指導要領と国語教師との関わり合いを端的に示すことになる。

それゆえ、学習指導要領が教科書作りにどのように影響し、そしてそれを国語教師がどのように受け入れたかを、この13年検定版を材料にして考察してみるのである。その中でも中学校の国語教科書として光村図書の『国語』（以下、光村）と三省堂の『現代の国語』（以下、三省堂）とをとりあげることにする。それは、中学校の教科書は、高校のものと比べて学習指導要領との関わりが顕著だからである。

なぜ、光村と三省堂なのか？

13年検定版は、光村と三省堂の他に、教育出版、東京書籍、学校図書が検定を受け出版されていて、この五社しかない。その中でも、光村と三省堂は、学習指導要領の改訂への対応にしても、その結果としての教科書占有率（＝販売数）にしても対照的である。この点について、石原千秋氏は『国語教科書の思想』（ちくま新書 二二〇〇五年）P 14～P 15）で次のように指摘している。

中学国語に関しては、同じく二〇〇〇年度に検定を通過し、二〇〇二年度から二〇〇五年度まで使用される光村図書の教科書と三省堂の教科書を分析の対象とした（実際には、二〇〇四年に発行された教科書を分析の対象とした）。この二社の教科書を分析の対象とした理由は、やはりシェアにある。『内外教育』二二〇〇・一・二二〇（誌上によると、

二〇〇二年度で光村図書が三八・二パーセント、三省堂が二四・五パーセントである。合計すると六二・七パーセントになる。

中学国語のシェアでは特筆すべきことがある。実は、二〇〇一年度では光村図書が五四・八パーセントのシェアを誇り、三省堂はわずか九・四パーセントのシェアでしかなかったのである（『内外教育』同前）。三省堂は、この時点では四位だった。それが一年後には先のような数字になってしまったのだ。三省堂は一気に二位に躍り出た。光村図書の凋落ぶりと、三省堂の大躍進は好対照をなしている。二社のシェアの合計はほとんど変わらないから、数字の上からは、光村図書の減った分のシェアを三省堂がほぼそっくり奪った形になっている。

三省堂が大躍進した理由は、『内外教育』では「先生の創意工夫を生かそうと」「本編」と「資料編」の二部構成に変えた編集」にあると分析されている。

（参考…二〇〇〇年は平成12年。）
ここに書かれている「二〇〇二年度から二〇〇五年度まで使用される」教科書とは、私の言う「13年検定版」のことである。比較されている「二〇〇一年度」の教科書とは、平成8年検定済みのもので、これは平成元年の学習指導要領の改訂にもとづいている。石原氏の指摘のように、13年検定版のシェアは、三省堂が「大躍進」し、その分光村が「凋落」した。この理由を『内外教育』では「先生の創意工夫を生かそうと」「本編」と「資

料編」の二部構成に変えた編集」にあると分析しているが、はたしてそれだけだろうか。そこには、平成10年の学習指導要領の改訂とそれに対する国語教師の反応とが影響しているのではないか。教科書を考える、すなわち学習指導要領の指針と国語教師の意向と出版社の編集方針との関わり合いを考察する一つの視点として、中学校の13年検定版をとりあげた理由は、そこにある。

なぜ、教科書の目次なのか？

その分析、考察の資料として三省堂と光村の13年検定版の目次を使う。目次には、その本全体の姿が示されていると考えるからである。松岡正剛氏は、本を読むとき先ず目次でその本の概要をつかむと言う。私は、年度の最初の授業で目次によって年間の授業計画を説明する。目次には、その本の編集方針が示されている。いわばその本の全体像がそこにあると言える。また、教科書採択の際も目次は重要なものの一つでもある。

そこで、教科書において出版社と学習指導要領と国語教師とがどのように関わり合うのかをテーマにして、光村と三省堂の中学校13年検定版の目次を比較材料として用いて、分析、考察をしてみることにする。

2. 資料

(1) 中学教科書の目次

注1…目次のレイアウトは、できるだけそのままの形で示し

てある。

注2…ゴシック体の数字は、その教材の分量を示したページ数である。コラム以外の教材では、「学習のために」(三省堂)のような学習課題を示したページも含まれている。また、三省堂の13年検定版に特徴的な「資料編」に合わせるために、光村の13年検定版・8年検定版及び三省堂の8年検定版にある「付録」で、表現・読書・文学史に関するものもページ数に含めた。しかし、漢字表や文法の活用表はページ数から外した。

注3…⑦⑧は、次に示す教材の分類を示した数字である。文章の種類に関しては、特に説明文と随想との区別が難しい教材もあるが、指導書の分類に準じた。

- ①…説明文、評論、記録文。
- ②…小説、物語、戯曲。
- ③…随筆、随想、紀行文。
- ④…詩、短歌、俳句。
- ⑤…言語事項(文法、漢字)。
- ⑥…情報、読書。
- ⑦…表現に関するもの。
- ⑧…古文、漢文。
- ⑩…その他、学習目標、単元扉、文学史など。

A.三省堂『現代の国語』（平成13「二〇〇二」年検定済み）

【現代の国語Ⅰ】

朝のリレー	谷川俊太郎	④	2
聞きひたる		①	1
1 ところをひらく		①	1
竜	今江祥智	②	13
		①	1
「自分新聞」をつくらう		⑦	5
		2	⑤
2 わかりやすく伝える		①	1
クジラの飲み水	大隅清治	①	9
		1	⑤
討論ゲームをしよう		⑦	7
		2	⑤
3 平和を願う		③	8
アイスキャンデー売り	立原えりか	③	8
「読書郵便」を楽しむ		⑦	8
表現ブラザ1		⑦	2
		2	⑤
4 事実をとらえる		1	⑤
		2	⑤
玄関扉	渡辺武信	①	9
		①	1

レポートを書こう		⑦	10	1	⑤
		4	⑤	2	
5 古典と出会う		1	⑤	3	
わたしたちと古典	かくや姫の物語	⑧	9	1	⑤
		①	1	⑤	4
矛盾―故事成語		⑧	4	2	⑤
		2	⑤	2	
6 自分を見つめる		1	⑤	4	
空中ブランコ乗りのキキ	別役実	②	15	1	⑤
		①	1	⑤	5
体験文を書こう		⑦	9	2	⑤
		2	⑤	2	
7 ことばをとどける		①	6	1	⑤
食感のオノマトペ	早川文代	①	6	4	⑤
ウソ	川崎洋	④	4	2	⑤
トロッコ	芥川龍之介	②	16	8	⑤
スピーチで振り返ろう		⑦	8	2	⑤
表現ブラザ2		⑦	2	2	⑤
		2	⑤	3	
(ワークショップ)					

学校案内パンフレットをつくらう

《資料編》

カラー資料集

情報コラム

表現コラム

ことばの世界

読書の森へ

雲

クジャクヤママユ

ボフテイア、はじめの一步

この小さな地球の上で

犬と肉のこと・川柳

漢字

作者・筆者紹介

⑦ 10

⑦ 1

⑦ 8

⑦ 4

⑦ 8

⑤ 4

⑥ 6

② 20

② 16

③ 6

① 10

⑧ 2

〔現代の国語2〕

未知へ

聞きくらべる

1 ところをかわす

小さな手袋

内海隆一郎

短歌の世界（解説十二首）

表現ブラザ1

木村信子

④ 2

① 1

① 1

② 18

① 1

⑦ 2

⑤ことば発見1

2 環境を考える

ホテルの里づくり

ポスターセッションをしよう

3 平和をもとめる

わたしが一番きれいだったとき

『少年H』で伝えたかったこと

焼け跡―『少年H』より

4 考えを伝え合う

心のバリアフリー

意見文を書こう

5 古典に親しむ

平家物語―敦盛の最期

漢字の世界

⑤漢字の部屋1

① 14

⑦ 7

② 2

① 1

① 1

④ 4

① 6

② 18

② 2

① 1

① 12

⑦ 6

④ 4

① 12

① 1

④ 4

① 1

⑧ 12

⑧ 4

② 2

① 1

⑤漢字の部屋4

⑤漢字探索2

⑤漢字の部屋3

⑤ことば発見2

⑤漢字探索1

6 文学を楽しむ			
ジーンズ	高橋順子	④	1
走れメロス	太宰治	②	27
7 ことばで通い合う			
対話を考える	平田オリザ	①	8
対話劇をしよう		⑦	6
表現ブラザ2		⑦	2
枕草子・徒然草		⑧	8
(ワークシヨップ)		2	
ニュース番組をつくらう		⑦	8
《資料編》		⑦	8
カラー資料集		⑦	8
情報コラム		⑦	8
表現コラム		⑦	8
ことばの世界		⑦	8
読書の森へ		⑦	8
注文の多い料理店	宮沢賢治	②	16
夏の庭	湯本香樹実	②	12
自転車の練習	さくらももこ	③	8
焼きもの	小泉和子	①	6
		⑤	漢字探索3

漢字	作者・筆者紹介		
現代の国語3			
峠	真壁仁	④	2
聞きふかめる		①	1
1 ことばをつなぐ		①	1
ことばが輝くとき	俵万智	③	6
俳句の世界(解説+十一句)		④	8
表現ブラザ1		⑦	2
2 情報と向き合う		2	
メディアとわたしたち	見城武秀	①	11
パネルディスカッションをしよう		⑦	8
3 平和を築く		①	1
仮懸帯所にて	峠三吉	④	3
平和を築く	荒巻裕	①	10
地雷と聖火	クリス・ムーン	①	8
		2	
		⑤	漢字探索1
		⑤	漢字の部屋3
		⑤	漢字の部屋2
		⑤	文法の窓1
		⑤	漢字の部屋1
		⑤	ことば発見1
		⑤	ことばの部屋1

4 視野を広げる	① 1		
「ありがとう」と言わない重さ			
主張文を書こう	⑦ 8	呉人恵	① 13
5 古典を楽しむ	⑧ 7		
和歌の世界―万葉・古今・新古今	⑧ 7		
おくのほそ道	⑧ 7		
6 文学を味わう	⑤ 漢字探索2		
猫	⑤ 1	トーベイヤンソン	② 13
初恋	④ 2	島崎藤村	④ 2
表現プラザ2	⑦ 2		
7 明日へ	⑤ 漢字の部屋5		
未来の花たちへ	③ 9	落合恵子	③ 9
故郷	② 22	魯迅	② 22
風景から学んだこと	③ 11	椎名誠	③ 11
(ワークシヨップ)	⑤ ことばのコラム3		
	1		

グループ雑誌をつくらう		⑦ 8
《資料編》		
カラ―資料集		① 1
情報コラム		① 8
表現コラム		⑥ 4
ことばの世界		⑦ 6
読書の森へ		⑤ 10
風になつたお母さん		⑥ 8
野坂昭如		② 12
風の色		③ 4
江國香織		③ 4
流線型		① 6
高木隆司		① 6
孔子のことば 「論語」より		⑧ 2
ことばを旅する (広がる読書)		⑥ 8
漢字		
作者・筆者紹介		

B. 光村図書『国語』(平成13「二〇〇二」年検定済み)		
【国語1】		
一 新しい出会い		
言葉で伝えよう		
「声を届ける」		
「友情」つてなんだろう (スピーチ)		
親友		
赤川次郎		
② 13	⑦ 1	⑦ 1
	⑦ 11	① 1

故郷	魯迅	②	20
二つの悲しみ	杉山竜丸	③	7
お辞儀するひと	安西均	④	5
視野を広げ、考えを深めよう		⑦	5
自分の考えを訴えよう		⑦	4
言葉の学習2		⑤	3
言葉の学習4		⑤	1
本の世界を広げよう		①	1
宇宙を見渡す目	小平圭一	①	10
〔読書生活を振り返る〕		⑦	2
言葉の学習3		⑤	4
〔書くことの学習3〕		⑦	4
文法3		⑤	4
漢字の学習5		⑤	5
未来に向かつて		①	1
物語を掘り起こそう		⑦	4
アラスカとの出会い	星野道夫	③	10
温かいスープ	今道友信	③	6
世界は一冊の本	長田弘	④	4
わたしを束ねないで	新川和江	④	3

(2)、ジャンル別の割合 ※数字はパーセンテージ(%)

A. 三省堂、13年検定版。()は8年検定版。

	〔1年〕	〔2年〕	〔3年〕
① 評論等	12・4 (9・9)	17・2 (9・7)	18・0 (15・3)
② 小説等	29・1 (28・0)	33・2 (32・2)	17・7 (27・6)
③ 随筆等	5・1 (16・7)	2・9 (11・4)	11・3 (6・1)
④ 韻文等	2・2 (3・9)	5・8 (4・7)	5・6 (7・1)
⑤ 言語等	10・9 (19・5)	9・5 (20・5)	14・7 (14・3)
⑥ 情報等	3・3 (1・1)	3・3 (1・3)	7・1 (1・4)
⑦ 表現等	25・1 (12・1)	12・8 (8・4)	12・8 (8・5)
⑧ 古典等	5・5 (6・0)	8・8 (9・1)	6・0 (10・9)
⑨ その他	6・5 (2・8)	6・6 (2・7)	6・8 (8・8)

B. 光村、平成13年検定版。()は8年検定版。

	〔1年〕	〔2年〕	〔3年〕
① 評論等	15・8 (15・8)	13・8 (17・0)	7・5 (14・1)
② 小説等	19・6 (43・2)	20・1 (35・4)	18・0 (21・9)
③ 随筆等	10・8 (2・4)	8・6 (6・3)	16・2 (9・3)
④ 韻文等	0・8 (5・5)	6・3 (6・6)	4・5 (8・6)
⑤ 言語等	16・5 (11・6)	16・4 (12・8)	19・2 (20・4)
⑥ 情報等	0・4 (1・7)	0・4 (2・4)	3・0 (1・5)
⑦ 表現等	26・2 (11・0)	22・3 (7・6)	17・7 (7・4)
⑧ 古典等	6・9 (6・2)	9・3 (9・0)	11・3 (9・7)
⑨ その他	3・1 (2・7)	3・0 (2・8)	2・6 (7・1)

C. 13年検定版での三カ年合計の比較。()は8年検定版。

	三省堂		光村	学校図書
① 評論等	15・8	(11・7)	12・3	(15・7)
② 小説等	26・7	(29・3)	19・2	(33・8)
③ 随筆等	6・4	(11・3)	11・8	(5・9)
④ 韻文等	4・5	(5・3)	3・9	(6・8)
⑤ 言語等	11・7	(18・1)	17・4	(14・8)
⑥ 情報等	4・5	(1・3)	1・3	(1・9)
⑦ 表現等	16・9	(9・6)	22・0	(8・7)
⑧ 古典等	6・7	(8・7)	9・2	(8・2)
⑨ その他	6・6	(4・8)	2・9	(4・1)
			3・0	0

(3)、13年検定版の採択状況(占有率)

※資料は、『内外教育』(二〇〇一年11月20日発行)による。

	()は8年検定版。	
1 光村図書	38・2%	(54・8%)
2 三省堂	24・5%	(9・4%)
3 教育出版	18・9%	(21・1%)
4 東京書籍	16・5%	(12・1%)
5 学校図書	1・9%	(2・6%)
	減0・7%	

3. 分析、考察

目次を三年間分示したのは、中学校の教科書の採択が四年サイクルで、一年二年三年まとめて行われるからである。つまり、三年間分が一冊の教科書として見なされて採択されるのである。例えば、平成10年度から光村を使っていた学校が、四年後の平成14年度から三省堂に変えた場合、その学校の三年生は一年生二年生では光村を使い、三年生のときだけ三省堂を使うことになる。(この点を配慮して三省堂は『平成9年度以降用「現代の国語」における移行措置資料」という冊子を教科書につけている。)

こういう採択方式を考えると、光村の編集に疑問が起ころ。光村の13年検定版の「国語3」には、短歌・俳句教材がないのである。それまでは光村も含め各社とも、三省堂の13年検定版のように二年で短歌、三年で俳句を載せている。他社の教科書に切り替えても二年で短歌、三年で俳句を扱えるからである。同じ出版社の教科書を使うにしても、四年ごとに新たな版のものを使うことになるから、二年生三年生は前の版ではなく新しい版のものを使う。となれば、光村の13年検定版を採択した学校では三年生は俳句を学ぶことなく中学校を卒業することになる。それ以前に光村を使っていたても、である。では13年検定版で光村は、俳句をどう扱っているかという点、「国語2」の「本の世界を広げよう」の単元の「短歌と俳句、それぞれの表現」という項目(P25・*1)で短歌と一緒に扱っている。二年生

だけで学ぶのである。そこでは、高田宏の解説（短歌三首と俳句五句とについて）で始まり、短歌八首、俳句七句が載っている。三年で俳句が扱われないのは光村だけである。光村はその後の17年度検定版で、第二單元に俳句の解説（宇田喜代子）を載せ、「学習を広げる」の「資料」に俳句十六句を載せている。さらに最新の23年検定版では、第二單元に宇田喜代子の解説に続けて俳句十六句を載せている。このことから見ても、13年検定版での俳句の扱いは特別であったことが分かる。

なぜ、光村はこのような編集をしたのであろうか？

この疑問を解くには全体を見る必要がある。そこで、光村と三省堂との「読む」教材（2、資料、2）、B・Aの分類①・②・③を合計）を13年検定版と8年検定版とで比較してみる。（一）の数字は8年検定版である。

光村	「一年」	46・2%	(61・4%)	15・2%減
	「二年」	42・5%	(58・7%)	16・2%減
	「三年」	41・7%	(45・3%)	3・6%減
三省堂	「一年」	46・6%	(54・6%)	8・0%減
	「二年」	53・3%	(53・3%)	増減なし
	「三年」	47・0%	(49・0%)	2・0%減

光村は、「読む」教材を一・二年で大幅に減らしているが、それに比べて三年では減らしていない。つまり三年の「読む」教材のページ数を確保するための手段の一つとして「俳句」を二

年に組み入れたのではないかと推測できる。その理由として、三年にある小説教材の「握手」「故郷」を外すことができなかったから、あるいは、高校受験を控えて「読む」教材を減らすことは現実的ではなかったから、ということが考えられる。俳句教材はそれほどページ数を必要とするものではないが、それでも二年生に回さざるを得なかったのである。

その代わりとして増やしたのは、資料を見ても分かるように「表現」教材である。量的に増えたばかりではない。編集方針が「表現」重視になっている。それまでの光村は、詩教材から入っていた。しかし13年検定版はそうではない。「国語1」の「言葉で伝えよう」は単なる単元目標ではない。表現教材を示す題名である。そこには詩が四つ載っているが、その詩を読み味わうのでなく、表現の補助教材として扱っているのである。赤川次郎の「親友」（小説）も同様である。「国語2」「国語3」の第一單元も同じ編集になっている。他の單元でも「表現」との関わりが色濃く示されている。光村の編集方針は、平成10年の学習指導要領改訂の指針を忠実に反映した結果のものである。またゆとり教育＋総合学習実施による授業時間数減の影響も配慮しての編集でもあった。つまり、学習指導要領の改訂により従来の編集方針を大きく変えなければならなかったのである。

一方の三省堂はどうであろうか。

目次を見て、特徴的なことが二つある。一つは、「本編」と「資料編」とに分けた他に、「読む」教材・「表現」教材・「言

語事項「教材・「読書」教材とが明確に分けられている点である。もう一つは、詩教材から入っている点である。目次を見ると、各学年とも最初に詩があがっている。しかし、教科書の「本編」の最初に詩はない。表紙の裏の見開きに詩は載せられているのである。また、前に光村と比較したように「読む」教材の比率が8年検定版とそれほど減っていない理由は、「資料編」に「読書」教材が組み入れられているからである。光村にも「読書」教材はあるが、それは単元の間に入り込まれていて、そこにもそれに関連した表現事項がある。(光村の「読書」教材も「読む」教材の中に含めて比率は計算してある。)三省堂でも「表現」教材の比率は増加している。しかし、教科書のページをやりくりして、見た目にも実質的にも「読む」教材や韻文教材を極端に減らすことをしなかったのである。

三省堂は、平成10年の学習指導要領の指針を考慮に入れなかったのではない。光村とは別の意味で、その指針に忠実に従ったと言える。それは、「読む」事項・「表現」事項・「言語」事項をバランスよく明確に分けたということである。それまでの「読む」ことに偏った教科書から「表現」への重視という指針を、他の領域とのバランスをとりながら、取り込んだのである。言い方を換えれば、見た目は大きく変わったようでも、実質的には従来の教科書と変わらない編集であったということになる。「従来」を「8年検定版・光村」と言い換えてもよいかもしれない。付け加えて言えば、「ワークシヨツプ」という目新しい表現が使われているが、三省堂の「表現」

教材は、8年検定版のものと内容的に大きくは変わっていない。それは、「表現」教材として生徒の興味を喚起するものである。

このような三省堂の編集方針が国語教師の意向と合致したのではないかと私は分析する。

紙幅の関係で目次まで示すことはできないが、光村のような、「表現」を全面的に打ち出した編集をしたのが教育出版であり、三省堂のような、「表現」を従来より重視ながらも「読む」教材とのバランスをとった編集をしたのが東京書籍であった。学校図書は、いずれでもなく従来の「読む」教材に偏った編集方針(資料(2)、Cを参照)そのままであった。採択の占有率(資料(3)を参照)で分かるように、光村型編集は減少し三省堂型編集は増加している。学校図書は、若干であるが減らしている。

国語教師はどのような教科書を望んだのか？

学習指導要領の平成10年の改訂のポイントである「表現」重視に対して国語教師は否定的ではなかった。それは、学校図書のシエアの減少からもうかがえよう。しかし、針が「表現」へ振れすぎた編集に対しても受け入れることができなかつたのである。これは教場の国語教師の保守的傾向を示すものではない。「話し上手は聞き上手」と言われる。話すことの上手な人は相手の話を聞くことも上手であるということである。相手を考えずに一方的に話して相手を説得する、そういう技

術を国語教育で育てるわけではない。言葉のキャッチボールができる力を育てることが目的である。同様に「書き上手は読み上手」とも言えよう。文章からその書き手の考えを的確に読み取る力をつけることも書く力を間接的に養うことになる。書くために読むのではなく、読むために読むこと、それが書く力をつけることにもなるということである。もちろん実際に書くこともしなければならぬのであるが。国語教師は、その「読む」「書く」「話す」「聞く」、あるいは散文と韻文とのバランスのよい教科書を選択したのではなからうか、それが教場の教師の意向だったのである。

このような13年検定版の教科書の分析は、各出版社で当然行われたはずである。それが次の17年検定版に現れている。同じ平成10年の学習指導要領を踏まえた教科書であるが、かなり変わっている。五社のうち学校図書を除く四社が、従来のA5版よりひとまわり大きなB5版サイズの教科書になっている。これは、教材数をより多く確保するためである。一年用のものから二段組の教材が増えていることも、このことの裏付けとなる。光村では、工藤直子の「野原はうたう」という詩教材が第一単元の冒頭教材として復活している。17年検定版全体のバランスをみるために、13年検定版との各ジャンルでの比較を、次に示す。数字はパーセンテージであり、()は13年検定版のものである。

	三省堂	光村図書
① 評論等	14・0 (15・8)	16・3 (12・3)
② 小説等	23・5 (26・7)	22・0 (19・2)
③ 随筆等	2・9 (6・4)	4・9 (11・8)
④ 韻文等	4・5 (4・5)	6・6 (3・9)
⑤ 言語等	18・8 (11・7)	14・1 (17・4)
⑥ 情報等	6・0 (4・5)	3・2 (1・3)
⑦ 表現等	14・9 (16・9)	17・6 (22・0)
⑧ 古典等	8・7 (6・7)	10・7 (9・2)
⑨ その他	6・7 (6・6)	4・5 (2・9)

光村も「読む」教材の割合が増えて、三省堂の13年検定版に近くなっている。このことから、光村の13年検定版の編集は例外的であったことが分かる。

日本語を通して言葉を学ぶことが、国語教育の目的であると私は考えている。その言葉とはコミュニケーションの手段ばかりではなく、言葉で書かれた文章を読むことでもその見方を知るということも、自分で文章を書くことで自分の考えが明確になるということも言葉の働きである。そのために読む力や書く力をつけるということが国語を学ぶ意味でもある。と同時に、言葉はやはりコミュニケーションの道具でもあり、それも重要な働きである。「読む」「聞く」、あるいは「書く」「話す」という一方方向の学習では、コミュニケーションとい

う言葉の働きを学ぶことはできない。それぞれの力をバランスよくつけていくことが、コミュニケーション能力を高めることになるのである。教科書に求められているのは、そうしたバランスのとれた編集ではなからうか。

13年検定版の中学国語の教科書における、学習指導要領の指針と出版社の編集方針と国語教師の意向との関わり合いを通して、そのことが明確になったと、私は考える。

(明治大学付属中野中学校高等学校)